

# 西部大開発の中の少数民族生態移民

—— 肅南ヨゴール(裕固)族自治県における調査報告 ——

マイリーサ

## はじめに

近年、中国では沿海地域との経済的格差を解消する目的で西部大開発が急スピードで進められている。西部は多くの少数民族の居住地域であり、中国の少数民族の約八〇%がそこに生活している。

中国では「少数民族地域は土地が広大で、地下資源が豊富で、開発するのに大きな潜在力をもっている」と考えられているので、少数民族地域の開発がこの大開発のなかで特に脚光を浴びている。しかし、中国大陸を西から東に貫く主な河川である長江や黄河などの源流地帯に位置する少数民族居住地の生態環境悪化の問題が中国全土の持続的な

発展に大きく影響を与えてきたために、中国政府は少数民族地域の環境問題にも関心を寄せるようになってきた。それにより、西部大開発のプロセスのなかで生態環境保全の問題が強調されるようになっていく。

祁連山北麓の黒河流域は、生態環境が最も悪化している地域の一つとされている。黒河流域とは、南部の祁連山水源涵養林、北部のゴビ砂漠と中部のオアシスから構成する生態システムである。上流の水源涵養林地帯にはチベット族とヨゴール族などが住み、中流域のオアシス地帯には主として漢族が住んでいるが、そこにはヨゴール族やモンゴル族などの少数民族も住んでいる。下流域の内モンゴル自治区エチナ旗にはモンゴル族遊牧民が住んでいる。

ここでは生態環境の再生・保全プロジェクトの実施に当

たつて、流域住民の人口分布調整および生業転換の政策が行われている。こうした政策の実施にともない、生態移民が発生しているが、そのほとんどが少数民族である。このプロジェクトは北京が黄砂被害に見舞われたことにより始められたものだと言われている。

最近中国で作られた甘肅省の地図には、「黒河流域生態保護地域」という表記の「地域」が加わっている。そこは河西回廊中部のゴビ砂漠地域に当たり、行政的には肅南ヨグル族自治県の明花区になる。この地域にはヨグル族、漢民族、チベット族、回族などが生活しているが、ヨグル族が人口の八九%を占めている。そこは多数の移民が発生している地域であると同時に、多くの移民の受け入れ先でもある。筆者は二〇〇二年七月から八月にかけて肅南ヨグル族自治県に赴き、ヨグル族移民が多く発生している地域である同県明花区を中心に少数民族生態移民について実態調査を行った。

## 生態移民が発生した背景

### 移民の移出地明花区蓮花郷

一九九〇年代後半、自治県の明花区明海郷の草原で国家農業の総合開発区が作られ、牧民を集中移住させ、農地開発が行われはじめた。現在はそこにすでに三つの移民村が

できている。筆者はその一つである双海村を調査の対象として、彼らの移住のプロセスについて考察を行った。それにあたって、まず、移民の移出地である明花区蓮花郷に赴き、なぜ彼らが移住したかについて聞き取り調査を行った。

明花区蓮花郷に生活する人々は昔から放牧業を中心に生業を立て、自然を頼りに生活してきた。中華人民共和国以前、ここには四〇余世帯の牧民が生活し、約一万頭の家畜を放牧していた。現地の年配者の話によれば、昔の蓮花草原は人口が少なく、牧草地がよかつたほか、湖も大きく、野生動物や植物が豊かだった。それに、地下の水資源も豊富で、一メートルほど掘れば水が出ていたという。

一九五〇年代以降、蓮花郷は人口が急増し、家畜も増え、ラクダと馬が三〇〇頭（請け負い政策実行以降は全部処分された）、牛と羊が約二万頭（匹）にもなった。しかし、長年旱魃が続いたため、現在、蓮花郷における利用可能な牧草地の面積は一九五〇年代に比べて約半分に減っているという。

こうした自然災害よりもこの数十年間にわたる周辺農業地域との緊張関係が彼らの生活に大きな不安を与えてきた。明花区の上流側地域の農業地帯では今までもずっと大規模な灌漑農業開発が行われてきたほか、中華人民共和国建国以来、政府は国土資源の開発のために、幾度の人口移動を動員してきた。西北地域の主な移入地は河西回廊のオアシス



東南裕固(ヨゴール)族自治県略図

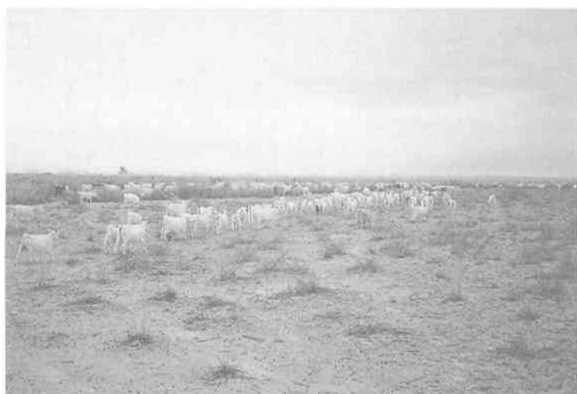
であったが、現在、甘肅省の食糧の七〇％がこの河西回廊で生産されている。しかし、明花の牧民たちは、「河西回廊オアシスは国家レベルの食糧基地として発展しているが、わたしたちのところは、地下水の水位が下がり、湖も枯れはじめている。わたしたちはこれ以上この自然を頼りに生活できなくなっている」と、開発に対する不平をもらしている。

特に、この数十年以来、この周辺農村地帯の使用面積がますます牧畜区に広がってきた。それにより、牧民たちの生存の空間が圧迫され、厳しい対応に迫られている。例えば、ヨゴール族の牧民が実際は自分たちの牧草地でもあるはずの周辺農家の使用地や公有地にすきをねらって自分たちの家畜を入れ、その間に自分たちの牧草地を休ませるようなこと

もしている。

「文化大革命」時代、ここでは農村地域の画一的やり方により「居民点」（牧民新村）が作られ、牧民たちの住居がそこに集中させられ、農地開発をさせられた。そのために、伝統的な放牧業が「半農半牧」の生産様式に切り替えられた。そして、牧草地と家畜との調和的な関係が無視され、「居民点」周辺の牧草地が悪化しはじめた。その後、「居民点」への移住が失敗し、牧民たちのほとんどがもとの場所にもどったが、そこに残ったのは、その住居を子供の教育のためにしばらく利用せざるをえなかった牧民たちばかりだった。

政府によるここでの人口分布調整が数年前からすでに実行されている。同県では、二〇〇〇年から草原の負荷を減らすと同時に、牧民の「脱貧」（貧困から脱出する）問題を解決する目的で、一部分の牧民を蓮花草原から明海農業総合開発区に移住させ、農地開発をさせるという政策を取ってきた。それにより、蓮花草原の人口を減らし、草原の植生の回復を図ろうとしている。その背景には一九九〇年代から「再造一個河西」（もう一つの河西を造る）という国家レベルの農田開発事業が推し進められてきたことがあり、その事業は普通「再造戰略」と呼ばれていた。当時は農田開発を行ったものに農田開発補助金を与えるという優遇政策があったが、それに、畜産品価格の下降と農産品価格の



蓮花草原ゴビ地帯▶



◀1970年代に建てられた  
蓮花草原の「居民点」

上昇というもう一つの要因があった。

当時、県当局の主なメンバーは農業地域出身の漢民族で、中にはヨゴル族自治県に来るまでに隣接する農業県で農業高度成長のために実績をあげた人物もいたが、彼らはそれまで農村地域で蓄積してきた知恵である「灌漑文明」によって少数民族放牧地の問題を解決しようとしていた。国家農業開発優遇政策をうまく利用して農田開発を進めれば、草原の牧民たちが豊かになれると同時に草原の生態環境も保全できると当時の県指導部は判断をしていた。そのために、県は「農業発展と草原環境保全との有機的な結合を図る」という戦略を打ち出した。

現在すでに約七〇世帯の牧民たちが農業開発区への移住を余儀なくされているが、移住者のほとんどが二〇代から四〇代にわたる若い世代や中年の人々である。したがって、移住しなかったのは、年寄りや家族に病人、または障害者などを抱えている世帯および男の子をもたない世帯ばかりである。男の子をもつ世帯が積極的に移住した理由については、将来の子供の結婚に向けて住居を確保するた

めとも考えられている。

このように現在この地域が直面しているのは高齢化の問題であり、また移住に伴い地域の公共施設や公務機関が農業総合開発区に移ったために、牧民たちがコミュニティの中心地を失ったことである。そのために現在牧民たちは下河清という隣接する農業県が開いている市場でしか互いに会えなくなっている。

しかしこうした状況の中で、牧民にとって救いになっていることが一つある。それはここ蓮花草原の牧民たちが育てた家畜の肉の安全性と味が評価され、売れ行きがよいことだ。現在、中国全体において、家畜を飼うことによって生業を立てる人が増えてきたため、家畜の数が急増し、「農家圈舎の家畜が草原の家畜よりも多く、草よりも羊が早く育っている」と皮肉られているほどである。

つまり、現在中国では大量生産、大量出荷という市場経済の時代に入り、家畜の飼養も競争力を増し、自然の草ではなく飼料などを利用した飼養法による羊や山羊の生産が牧民の伝統的な家畜の生産を圧迫している。一方、短期間で家畜を無理に肥らせるという飼育のあり方が中国でも社会的な問題になりはじめ、消費者の健康な生活を脅かしている。それにより中国では安い商品を求める消費者の心理に変化が生じ、量よりも質を求める傾向が強くなってきた。スーパーマーケットや商店などでは「無汚染草原天然肉」

（汚染のない草原の天然の肉）の付加価値が高いという消費者の心理が反映され、大量出荷が勢いを見せているなか、自然の中で育った家畜の良質商品としての稀少価値が認められはじめている。

現在、蓮花草原に残っているのはほとんど五〇代以上の年配の人たちであるが、伝統的な放牧をしている限り、彼らが育てた家畜の肉は市場から求められ、彼らは安定した生活が続けられるであろう。しかし西部大開発を背景に人々は安定よりも急速な発展に魅力を感じているのも事実である。実際、西部大開発のなかでこの経済成長のスピードは一〇%であることが要求されている。こんな雰囲気の中で行政側が関心を寄せているのは、伝統的な放牧方式から近代的な酪農への転換である。実際、こうした転換のプロジェクトが世界銀行の援助により移民の新居住地で行われている。

### 移民の現状——移住地明花区明海郷——

明海郷は蓮花郷と同一の行政区に属するが、約五〇キロにわたる砂漠地帯に隔てられて蓮花郷に隣接し、その面積は蓮花郷の面積より倍くらい広い。交通の便も蓮花郷に比べて恵まれている。この地域の住民も昔から放牧を中心に生計を立ててきたが、一九七〇年代から「上農業区」とい

う農業開発地が作られ、地元の一部の若い牧民たちが農業への生業転換をさせられた。一九八〇年に「上農業区」への移住は失敗し、牧民たちはほとんところへもどった。現在は開発当時掘られた井戸のほとんどが地下水位の下降により枯れている。

また明海郷は地理的に高台、酒泉という二つの大きい農業県に囲まれているため、牧草地の悪化状況は蓮花郷より厳しい。一九九〇年代、東南に位置する農業県が「許三湾土地開発区」という農業開発区を作り大規模な農地開発を行ったために、その影響が驚くべきスピードで肅南ヨグル族自治県へ広がってきた。そのために明海郷も県境内で「農業総合開発区」を作り、そこに移民を移住させ、人間の壁を作ることによって隣接する県からの外来開発を止めようとした。そして現在までに県内の黒河上流のヨグル族、チベット族、漢族などからなる約三〇〇〇世帯の約一二〇〇人をここに移住させ、三つの移民村を造った。移民たちはここで二万ムー（一三・三平方キロ）の土地を開拓し、灌漑用の深い井戸を合計一五〇個掘る計画を進めている。

移民村を作る際に、政府は移民の不満を最小限に抑えるよう移住後の生活改善を約束し、政府の投資で水道、電気、井戸、道路、学校、病院などの基本的な設備や施設を整備した。そして蓮花からの移民各世帯に住居建築補助金として一万元を与えるようにしている（ほかの二つの移民村の

人々は政府からの補助金をもらっていない）。ちなみに一世帯当たりの新築費は約二万元である。

移民たちは、草原を離れた時に家畜を売った金と政府からの補助金および借金で住居を建て、農地を開拓しなければならぬが、現在、移民たちはすでに新築に入居し、農業生産を始めている。筆者は彼らの現状について、蓮花郷からの移民に聞く機会があった。

移住の理由としては、子供が学校に行くのに便利でまた前に住んでいたところがあまりにも辺鄙であったこと以外に、新居地ではいろいろな優遇政策があったからだということ挙げているが、実際、彼らはこれからまったく経験したことのない農業を営んでいかなければならないので、移民たちの生活は精神的にも不安定でたいへん厳しい状況にあることがうかがえる。

それは移民たちが住居の建築と農地開拓のために多くの借金を抱えているからであり、また農業生産は放牧業とは違っていたいへんコストのかかる産業であるからだ。すなわち、電気、肥料、農薬および設備などの投資により採算がとれない場合が多いからである。それにより負債の返済に迫られ、その対応として兼業化や出稼ぎの現象が現れ、移民たちは世帯主の半分以上が出稼ぎに出かけたり、元の牧地で臨時的に放牧したりせざるを得なくなっている。そういう状況により、移民の中には経済的理由により子供が学

校に行けなくなっている現象も起きているが、学費を払う金ではより多くの農薬や肥料が買えるからだ。

こうした状況であるにもかかわらず、明海郷に移住してきた移民たちは、新居住地での住宅のために多くの借金を抱えているので、蓮花郷にもどろうと思ってもどれかなくなっている。たとえもどれたとしても、蓮花郷に残っている人たちが彼らを心から受け入れるとはかぎらない。なぜなら移住の際に彼らの多くは故郷に残った親や兄弟、親戚、村人たちとの間で移住をめぐってトラブルなどを起こしているからである。筆者がある移民に対し「故郷にもどりたいと思うか」と尋ねたところ、「もし私たちがもどれば、蓮花の人たちにお前らのせいで私たちの町、病院、学校、銀行、郵便局などすべての公共施設がなくなった。お前らがもどってきて何も何もないよ、と責められるに違いない。だから私たちはつらくても意地を張ってここにいろしかない」と答えてくれた。

そのために蓮花からの移民たちは、もし将来的に金に余裕ができれば、移住先での農地で牧草を作り家畜を飼うことを考えている。実際、この地域でも世界銀行の援助により、「圈舎工程」（家畜の囲いを作るプロジェクト）と「子羊育肥工程」（子羊を肥やすプロジェクト）が行われているが、同県の「西部大開発戦略計画実施」という文書の記述によれば、家畜の生産様式を二〇〇五年までに天然放牧か

ら次第に「半圈舎」か「全圈舎」に転換させ、それにより牧草地の負荷を減らし、経済、社会、生態を調和させ、持続的發展を図ることである。

現在は世界銀行からの投資を利用して、家畜の循環を加速させる目的で育草産業の発展と一〇万匹の羊を育肥するための基地の建設が進められている。具体的には、五〇世帯の農牧民に投資し、五〇〇ムーの良質な牧草を作らせ、五〇軒の高質育肥羊舎を建たせ、平均各世帯に八六〇〇元の収入の増加を目指している。それによりこの地域は将来的に地域がもっている独自性を切り捨てることになるが、地域の牧民たちもこれから画一的な大量生産という市場経済の競争に巻き込まれるようになる。

## おわりに

こうして明海郷に移住してきた移民たちは、最終的にどこどのような生産手段をとり、どのように生活していくものなのか、彼ら自身もまだわからないのである。彼らはさらに多くの借金を背負うことが予想されるが、実際、彼らは大量出荷という市場経済の原理にどこまでついていけるものであろう。

また生態環境保全の面においても、生態移民を犠牲にまでして行われた移住は、水資源だけではなくエネルギーな

どの大量消費により自然環境に悪影響をもたらしている。

開発地での資源浪費は伝統的な放牧生活をしてきた蓮花郷の場合とは比べものにならないほど深刻だからである。またこの明海郷は地理的に蓮花郷の上流側に位置しているために、明海郷の「新居地」での農業開発は、故郷である蓮花郷の地下水の水位下降を引き起こしている。このように人口分布調整による移民移住の現実には資源の浪費と生態環境の破壊を抑えたところか、かえってその規模を大きくし加速させている。

〔付記〕 本調査は総合地球環境学研究所の「オアシスプロジェクト」の研究成果の一部分である。現地調査ではヨゴール族研究者鐘進文氏（中央民族大学助教）の快いご協力をいただいた。ここに鐘進文氏に心からお礼を申し上げたい。

## 注

〔1〕 「西部地区」は中国の西部と西南の諸行政地域を指すが、「西部大開発」には西部と西南以外に広西チワン族自治区および内モンゴル自治区が加えられているので、実際、五つの少数民族自治区と二七の少数民族自治州が含まれている。このように「西部大開発」とは事実上少数民族地域の開発でもある。

〔2〕 現在、中国の乾燥地区における生態回復メカニズムと砂漠化防止対策の研究において黒河流域の人口構成を調整するべきだと考えられている。具体的には、水源涵養林地

帯では放牧業を停止させ、中流地域では土地の利用構造を調整し、節水灌漑や生態経済的な農業を行わせるべきだとしている。また下流域のエチナ河沿河地帯では遊牧民と家畜を移出させ、遊牧の停止を目的とする流域の人口分布調整政策がすでに始まっている。

〔3〕 肅南ヨゴール族自治県は中国における唯一のヨゴール族自治県であり、甘肅省の河西回廊中部と祁連山北麓に位置し、他の市や地区に隔てられている三つの地帯から構成される。人口は三五〇〇〇人強で、そのうちヨゴール族が二八％、チベット族が二四％を占めるほか、モンゴル族、回族、バウナン（保安）族、ドンシャン（東郷）族、トゥ（土）族などが居住し、少数民族が全人口の五六％を占め、統計上は少数民族が漢族の人口を上回っている。同県は行政的に六つの区、一つの鎮、二三の郷、一つの農業総合開発区、一〇の国有林場、九七の行政村から構成される。

〔4〕 この地域は河西回廊の中部に位置し、地形の低い湿地の一部であるために、この明花地域の生態系は河西回廊の気候に調節的な役割を果たしていると考えられている。ここが「黒河流域生態保護地域」に指定されたのはそのためである。